

コロギの コロは、自分^{じぶん}の 思い通り^{おもとおり}に ならないと、
すぐにおこったり もんくを 言^いったり します。

ですから、ともだちが いなく なり、今^{いま}では
ギロ 一人^{ひとり}に、なって しまいました。

「コロくん、東^{ひがし}のはたけに 行^いかないか。ナスが
ゆれて、青^{あお}く 光^{ひか}って いるんだ。きれいだよ。」
と、ギロが さそいに 来^きました。

でも、お母^{かあ}さんに しかられて、ふくれて いた コロは、知^しらん顔^{かお}です。
つぎの 日^ひ、また ギロが やって きました。

「西^{にし}の かわらに、ほかほかの 麦^{むぎ}わらの 山^{やま}が でき^きたんだ。ねそべると
気^きもちが いいよ。」



コロは、(行^いって みようかな)と 思^{おも}ったのですが、すなおに なれません。
「ふん……、麦^{むぎ}わらの 山^{やま}なんて くだらないうよ。」

コロは そう 言^いって、ことわって しまいました。

その つぎの 日も、ギロは にこにこしながら やって きました。

「お父^{とう}さんに、歌^{うた}を 教^{おそ}わったんだ。だから、きみにも 教^{おし}えて やろうと
思^{おも}ったんだ。きっと 氣^きに 入^いるよ。ピピピッピ リリリリリ コロコロコロ。」
とても ちょうしの よい、おもしろい 歌^{うた}です。

「なあんだ。おもしろく ないよ。なんだか、気^きもちが わるく なるよ。」
と コロが 言^いったので、ギロは、

「もう、きみとは あそばない。」

と 言^いって、おこって 帰^{かえ}って いきました。

(せっかく ギロくんが、来^きて くれたのに、わるい ことを 言^いって しまった。)
コロは、(あやまらなくてはいけない)と思^{おも}いましたが、なかなか 言^いえません。

（あやまるんだ。）

（あやまらなくても いいんだ。）

二つの 心が、たたかって います。

いつまで たったでも きまりません。

東の 空から、お月さまが 出て きて、

やさしく コロに 話しかけました。



「コロくん、きみの 顔を、

草の つゆの 玉で 見て ごらん。」

コロは、つゆの 玉に 顔を うつつして

みました。そして、（はっ）と おどろきました。

そこに うつつて いたのは、くらく しずんだ、かなしそうな 顔でした。

「これが、ぼくの 顔なのか。」

しばらく ぼかんと、見つめて いました。そして、なみだが 出て きました。



「さあ、なみだを ふいて、わらって ごらん。」

コロは、長い しよっかくを うごかして、なみだを ふき、小さく

「ピピッ」と、声を出して みました。

「そう そう、元気を 出して、口を 大きく あけて 歌うんだ。」

コロは、はずかしかったけれど、おねを はって 歌って みました。

「ピッピッ リリリ コロコロコロ コロロ。」

コロの 心は、晴れ晴れと して きました。

「すなおで、明るい 声が出たね。」

いつも、その 気もちで いるんだよ。」

コロの 顔は、今までとは ちがって います。

（あしたは、ギロくんに あやまろう。そして、

ともだちと 元気よく あそぼう。）

コロは、そう 心に きめました。

